

から考えてもいる。なお検討を要することであろう。

(未完)

〔注〕

- 1 内容については拙稿「九州大学図書館蔵支子文庫「神祇和哥」翻刻（「人文」第三号鹿兒島県立短期大学人文学会論集 一九七九年六月発行）参照
 - 2 32番「朝開」の第五句は、本書及び家集は「山あひの風」で等しく、夫木抄は「春のあけほの」となっている。
 - 3 「伊勢大輔集」「家経朝臣集」とも同趣の詞書をもった贈答歌。
 - 4 大山公淳著『神仏交渉史』「本地垂迹説の展開」による。
 - 5 本書の歌では「いつしろ」とあるが、「わ」の誤写とみられるので正して記した。
 - 6 小野篁没年は仁寿二年（八五二）又は（八六三年）といわれる。道真の左遷は延喜元年（九〇一）。
 - 7 『江談抄』卷三「公忠忽頓滅蘇生俄参内事」・『古事談』第一「公忠蘇生奏事并延長改元事」・「荏柄天神縁起」。
 - 8 『江談抄』卷三「野篁為二閻魔庁第二冥官一事」・『今昔物語』卷第二十ノ四十五話「小野篁、依情助西三条大臣語」。
- 〔論文受理 昭五五・九・三〇〕

78 雨よりも涙の数やまさるらん家を離し深き恨に

離家三四月 涙落百千川

79 うかりけり今夜の月をなかめても旧き情は袖の上露

去年今夜清涼殿に侍ると言心を

80 苔のむす瓦に松の風さひて涙に聞は只鐘のこゑ

都府楼纒看瓦色

観音寺只聴鐘声

天神縁起説話の成立については、笠井昌照氏に詳しい御研究がある。氏によれば建久、建保の頃からすでに縁起があり様々な形で伝えられたらしい。そして承久本「北野天神根本縁起」には飛梅説話も入っており、本書にもみえるあまりにも有名なこの詩文も縁起に引かれている。本書の北野の項目については恐らく縁起に拠ったものであるかと予想されるのであるが、なおやはり編者の漢文学への素養とか関心の程も認めなければならぬであろう。他にも「熊野」の、「置露や春あた、かにむすぶらん枝の南にいそく初花」に対して「南枝花初開とゆふ心なり」と注している。おそらく白氏の「南枝」「大庾嶺上の梅、南枝落ち、北枝開く」(白氏六帖九十九梅部)や和漢朗詠集、保胤の「南枝北枝梅 開落已異」等の意を解しているものであらうと思われる。

前記78・79・80は、それぞれ『菅家後集』の

○ 五言自詠

離家三四月 落涙百千行

万事皆如夢 時々仰彼蒼

○ 九月十日

去年今夜侍清涼 秋思詩篇独断腸

恩賜御衣今在レ此 捧持毎レ日拜ニ余香一

○ 不出門

一從ニ滴落在ニ紫荆一 万死兢々跼躄情

都府楼纒看ニ瓦色一 観音寺只聴ニ鐘声一

中懐好逐ニ孤雲ニ去 外物相逢満月迎

の句の心であることは言うまでもない。

七

以上かいつまんではあるが、本書の歌について作者、出典、成立可能と考えられる年代の推定、歌の引用のし方の問題点、本書独自の歌とみられるものの詠歌の傾向の一端、また時代背景からくるものであらう編者の知識、理解などについての私見を述べた。しかし左注部分に記された諸神社にかかわるいわれや垂迹説に関することごとには言及できなかった。紙幅の関係で残された問題については続稿に記すこととする。なお、作者の明らかになった歌にも異同をもつものがかかりみられたことから、本書独自の歌とみている中にも或は異文をもって出典の分明する歌が全くないとも限らないであらう。なお博搜の必要は感じている。しかし、独自歌の中には、編者自身の詠作がかなり含まれてはしまいかと左注のあり方など

ふれると、熊野にかかわる次の箇所がある。

90 いわし^{注5}ろの岡に苜敷萱菴松も契を結をきけり

此王子恋をして此所にはなるましき契松をしるしにむすひ
をき給へりされは哀なるかなや野中[・]に[・]た[・]て[・]る[・]む[・]す[・]び[・]松[・]と[・]も
よめり
(傍点筆者、以下同)

これは、熊野末社である「岩代王子」での有間皇子の、哀韻極まりない万葉歌の伝える政治的悲劇が、誤まり解されたものであろう。

万葉集卷二、挽歌

有間皇子自ら傷みて松か枝を結ぶ歌二首

141 磐代の浜松か枝を引き結び真幸くあらばまた還り見む

142 家に有れば筥に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る

長忌寸意吉磨結び松を見て哀しび咽ぶ歌二首

143 磐代の崖の松が枝結びけむ人は帰りにまた見けむかも

144 磐代の野中に立てる結び松情も解けず古思ほゆ

によるものである。おそらく万葉集歌の意識及び悲劇の皇子の意識は持っていたのであろうが、正しい知識ではなく、政治的悲劇が恋の悲劇にすり変えられたものであろう。中世的というべきか、当時の伝承的背景をのぞかせる部分であろうと思う。

このほか説話伝承についてみて同様なことの言える箇所がある。縁起類にもか、わりを持つ所であるが北野天神に関する記事の中に次の歌及び文章がある。

81 鳴神や雲のうへよりくたるらんなき名をそ、く深き涙に

有時天神鳴いかつちと成て洛中に人をそん方^(ママ)し給ふ或時此

里の家の庭にをちさせ給ふ 野相公一字千金はいかに高村

申させ給へは妻戸の内に千金をなき入させ給ふ 又申され

けるは三世契はいかにと申させ給ひければ即なりあかり給

ふ 其後高村のあたり十町より内に啼せ給ふことなし

82 なき名をはいかてか人のしつむへき神の北野、深き誓に

道真の鳴神説話は有名であるが、現在見ることでできる天神縁起

や説話類の中にはここに記された筥との話は伝っていない。道真の

左遷は筥没後の事^{注6}であり年代的に合うことではないが、説話の説話

たる所以で、当時こうしたことが巷間に語られていたものでもあろ

うか。『江談抄』『宇治拾遺物語』『今昔物語』などに伝えられる

嵯峨天皇との「無悪善」の落書や「一伏三仰不來待書暗降雨幕漏寝」

や「子子子子子子子子子子子子」を訓んだ筥広才の話や、公忠が頓死

して、冥宮門前で、金書札を持って、延喜帝を訴える菅公の姿をみ

た話^{注7}、また筥が閻魔庁の冥官であった話^{注8}などから共に超人的力量の

持ち主として理解され、両々相俟つての漢文学的博学の知恵くらべ

力量くらべのこうした説話が語られていたものであろうか。

同じく北野天神に関するもので、道真の詩文の一部を歌によりか

えたところがある。いわゆる句題和歌の形である。

(前文略)
つくし飛びたりし梅は跡也

77 別路の心つくしは遠とも花昔の主しわするな

物になって詠んでいるのではないかと思われる点などである。たとえば賀茂社の「御手水」の項に次の三首をあげる。

51 恋せしとおもふによらぬ心哉 木の下清き森の月影

52 祢宜事を神もうけすはいか、せん 法の台をさそふ川なみ

53 祢宜事をさのみ聞つる社こそ はてはなけきの森と成ぬれ

最後は古今集「題しらず」の「さぬき」の歌であるが、裏に秘められた意味合からここに置かれたものであろう。歌枕「なげきの森」

についても賀茂との関連をもつものではなくただ「嘆く・泣くことなる」の意としてこの歌がとられたものであるうことは言うまでもないが、またこの三首は賀茂御手洗川によせて明らかに伊勢物語六十五段、「恋せじと御手洗河にせしみそぎ 神はうけずもなりにけるかな」をふまえての、詠作とみられるものである。

また、香椎宮にかかわる歌の中に

111 千はや旧香椎の宮のあひ杉を両度かさす身にそ成ぬる

此御使に吉凶あり吉事を以二度も三度も立事あり

とある。左注の「此御使」が直接歌を受けているのか否か問題のあるところであるが、歌については作者及び細かい作歌事情は一切明らかでないので、敢えて憶測を試みる次第である。それは、編者が若しこの歌をここに置くに当って多少とも次の歌の意識があったのではなからうかと思われるからである。すなわち金葉集五六二番に次の歌がある。

隆家卿大宰帥に二たびなりて、後のたび香椎御社にまゐり

たりけるに、神主木もとの杉の葉を折て、帥のかうぶりにさすとて 神主大膳武忠

562 千はやぶるかしの宮の杉の葉をふた、びかざすわがきみぞ

きみ

隆家は長和三年十一月大宰権帥（三十六才）となり、翌四年赴任した。その後、再び長暦二年（六十才）大宰権帥に任ぜられ、長久二年までその任にあった。その後のたびの歌である。また新後撰集（一三〇三年成立）には大宰権帥に再びなった経任卿の歌

大宰権帥にかへり成て侍ける比、人のよろこび申ける返事に申て侍ける 前大納言経任

1405 知らざりき香椎の挿頭年ふりて過にし跡に帰るべしとは

などがある。

香椎宮の項には三首の歌を記すが、三首共に「両度」のことばを使って詠んでいることからしても編者の意識には前者、金葉集の歌によまれた「ふたたび」の意識が強くあったのではないかと思われる。

隆家の返し歌は、実際には、金葉集にもないので、この神主の歌への贈答の形では残されていないが、いわば隆家の立場に立つての、神主への返歌にふさわしいような歌が編者の意識から置かれたものではなかつたらうか——と。

さて、やや誤った解釈に立って記されているとみられるところに

それは、後述しようとする本書の散文部分に記された本地垂迹説にかゝる記述などとの関連に於てみても時代的に矛盾しないと考へられる。

五

次に前述してきた出典、作者名のわかる歌の引用のし方について見ておきたい。形式としては、各々神社にかかわる歌を集めた形をとってはいるが、その歌の詠作事情などをみれば、必ずしも適合しない歌の引かれている場合もみられるのである。たとえば「宇佐宮」に伊勢大輔の「薦枕かり寝の旅とあかさばや入江のあしの一夜ばかりに」を引くにあたって、次の詞書がある。

(前文略) 薦枕の事宇佐の宮の祭之時出させ給ふなり 祭多のせと号する所野の中に川のあるに鳥居立てくきぬきしめくらし 近辺の不浄をきよめて三年六年に三たひいておはします 薦のやうにした御躰にもちひ奉 宇佐宮昔かりそめに薦枕しとと、まりおはします也

と。24番の伊勢大輔の歌は、右の宇佐宮の祭礼に用いられるという薦枕からの連想で引かれたものであろうが、後拾遺集の詞書(25ページ参照)にみられるように、この歌は家経に贈った歌^{注3}であつて、宇佐宮とは無関係なのである。ただ薦枕の縁にひかれて、または連想を呼んでここに記しとどめられたにすぎない。また、68番の「見さぶらへ三笠と申せ宮木の、木のした露は雨に増れり」は、春日社

に引かれてはいるが、古今集の陸奥歌であつて元来無関係な歌であるが「三笠」(御傘)にひかれての掲出であらうし、この歌の前に置かれた

鹿鳴の大明神は春日に渡せ給ひける時は白鹿也 則鹿は御躰也 春日の社御本地は古日記在也

は、『春日大明神垂迹小社記』をふまえた常陸国鹿島宮よりの垂迹、また平安朝末期に描かれたという『春日曼茶羅』^{注4}には春日山を背景として社殿を描き神鹿を中心に春日社の本地を示している旨であつて、そうしたことをふまえての詞書といえようが、その中の「白鹿」と歌の「宮木の、木のした露」の連想も加つてのことであろうか。

こうした歌の引き方や誤つた解釈なども時として見られるのが本書の特徴の一つであり、概して上述の著名な歌人たちの歌は、それぞれの神社について数首の歌がある時、作者不詳歌(本書独自歌と考えられる)が前に並び、その後の方に置かれる傾向をもっている。

六

該書における独自歌——つまり作者、出典の不明な歌——は、調査結果からは前記二十五首を除いて、残る一一九首すべてと考えられるのであるが、その詠みぶりについて気づく点を二、三述べておきたい。

その一つは、その神社にまつわる古歌によりどころを求めて、それを発展させた形で心の推移を詠むとか、歌にまつわる史実上の人

(私撰集)

古今和歌六帖	2
新撰六帖	1
万代集	0
夫木抄	10

勅撰集の中、風雅集と新後拾遺集の成立は夫木和歌抄の成立より遅れるので、風雅集入集の104番、新後拾遺集入集の28番は勅撰集から引かれたものでよいと考えて、出典の時点を最大限下げて考えれば夫木抄までとなる。しかし該書の夫木抄入集歌は、たとえば28番は寛喜四年三月廿五日に催された「石清水若宮歌合」での詠作であるから、その方で見られ、104番は西行の歌集で見ることができるといふふう¹⁰⁴に勅撰集・私撰集・私家集その他歌合の記録などですべて見られたはずのものである。従って必ずしも夫木和歌抄の成立をまつ必要はなからうと思われる。

なお加うるに、家集と夫木抄のみにある歌などの場合、本書の表記が家集に一致する例のみ^{注2}られる点からも、それを裏付けているように思う。とすれば、後嵯峨院の御製27番を続拾遺集のみでしか見られなかったと仮定しても、勅撰集からの出典下限は続拾遺集と見てよいのではないかと考える。続拾遺集は、為氏の撰になり、弘安元年(一二七八)奏覧している(時に為氏五十七才)。

次にこれらの歌の作者を生没年代順に記すと次の表の如くなる。

妻越檀基		?
磨仲倍安	701~	770
さぬき(安倍清行女)		?
小大君(一条朝末頃まで生存か)		
和泉式部	976頃~	?
伊勢大輔(輔親女)		?
源俊頼	1055~	1129
源兼昌		~1112
西行	1118~	1190
源慈円	1155~	1225
源家長		~1234
藤原家隆	1158~	1237
藤原良経	1169~	1206
藤原家良	1192~	1264
藤原為家	1198~	1275
後嵯峨院	1220~	1272
藤原為氏	1222~	1286

引用するに適切な歌がなかったためか俊成・定家の歌を一首も引いてはいないが、特に十二世紀から十三世紀にかけての正統な和歌の流れをくむ錚々たる歌人たちに注目される。引用の歌数は、西行と家隆が三首ずつ、他はすべて一首ずつである。

年代的に最も下るのが定家の孫為氏である。為氏は前にもふれたように続拾遺集の撰者であり、弘安元年、五十六才の時に龜山院に奏覧したのであった。前述の27番御嵯峨院御製の続拾遺集入集のことから、歌集的には続拾遺集がその出典の下限とみられる旨を述べたが、作者の面からしても、その撰者為氏か下限ということになり、矛盾はない。

以上の点からみて、やはり十四世紀はじめに至って一応の成立を見、その後訂正が加えられたらしい夫木和歌抄の成立をまたずとも、凡そ十三世紀末ごろまでには本書の成立条件は十分整っていたといえるだろう。

り。よるになりて月のいと面白くさし出でたりけるを見
てよめるとなむ語り伝ふる。

68 見さふらへ三笠と申せ宮木の、木のした露は雨に増れり
(古今集一〇九一 東歌 陸奥歌)

稻荷 (6首の中)

86 瀧の水帰てすます稻荷山七日のほらはしるしと思はん
よみ人しらす (拾遺集一二一八)

熊野 (13首の中)

92 露もらぬ岩屋も袖はぬれにけりとかぬはいかにあやしからまし
西行 (山家集七九〇九・西行上人集)

那智 (7首の中)

104 木のもとに住ける跡を見つる哉那智の高根の花のかさして
西行 (風雅集一四六三・山家集七八四五・夫木抄)

那智山に花山院の御庵室のありける上に桜の木の侍るを
見て、住みかたとすればと詠ませ絵ひけむ事思ひ出でられ
て詠みける

107 御熊野、雨そう降て木陰のつかやに立る鬼のもこくさ
俊頼 (散木奇歌集四一九・袖中抄・夫木抄)

葛城神 (3首の中)

121 岩橋の夜の契もたえんへし明るわひしき葛城の神
小大名 (東宮女蔵人左近) (拾遺集一二〇一・小大君集)

玉津嶋 (6首の中)

127 人間は見るとやいはぬ玉津嶋霞入江の春の明ほの
藤原為氏 (続後撰集四一・明題和歌集)

《()内の歌番号は、勅撰入集歌にはその番
号を記し、重出する私家集その他の番号は省略。
また勅撰に入らない歌には、私家集(私家集大
成・続国歌大観)における歌番号を記し、他は
省略した。》

以上作者十七名、二十五首が、作者・出典のわかるものである。

ただ27 28 49 50 104の歌などにやや大きな異同がみられるが、49や50の
場合でも記憶ちがいや起しやすいまぎらわしい異同であり、編者に
よって意識的に変えられたと見るよりもこうした本文を持つ歌集が
当時あったか、または編者自身の記憶の誤りから来るものとみてよ
いのではないかと考える。

なお、歌の引き方などについては後述することとして、以上の出
典の分명한歌について整理すれば、勅撰集、私撰集入集歌は次のよ
うである。

(勅撰集)

万葉集	1	新勅撰集	1
古今集	3	続後撰集	1
拾遺集	2	続拾遺集	1
後拾遺集	3	風雅集	1
新古今集	2	新後拾遺集	1

28 八幡山神きりけむやつきけめ鳩つむぎの杖つゑ老おいてさかゆく道みちのためとて

源 家長朝臣(石清水若宮歌合)寛喜四年三月二十五日

・新後拾遺集一五〇八・夫木抄

29 八幡山向むかひへの里さとのほと、きすおそおもひしかたのこゑもかはらんず

藤原家隆(玉吟集一八八九・壬二集一四一〇九・夫木抄)

・詞林名所考

30 数かずならぬ我身わがみは旧ぬ男山老おきなせん神かみも哀あはかけなぬ

同 家隆(石清水若宮歌合・壬二集一五〇四四)

33 男山峯おきなの桜さくらを諸人もろびとのかさしの花はなに手てをりてそ見る

源 兼昌(永久四年百首・夫木抄・明題和歌集)

34 朝開桜山吹あさひかさしつ、かえるみつ野、山あひの袖

藤原家隆(玉吟集七一二・高松宮本百首和歌・夫木抄)

賀茂(19首の中)

43 かた岡おかの森もりの木の葉はも色いろつきぬ早田はやたのをしね今いまやかるらんらまし

藤原為家(新勅撰集二九七・大納言為家集一七七〇・詞林)

名所考・賀茂名所和歌合

44 片岡かたおかの木陰きかげすくるみたらしの川音かゝりねす、し夕闇ゆふぐらみの空

衣笠内大臣家良(新撰六帖・衣笠前内大臣家良公集四七〇)

・夫木抄・賀茂名所歌合・(太宰府本)

名所集

49 偽いつはりをた、すの宮みやの前まへにして空鳴そらなしつる時鳥ときどり哉

よみ人しらす(古今和歌六帖三三〇四〇・夫木抄)

50 雪降ゆきふりにせみの小川こがわを見わたせはた、すの竹たけは下しもをれにけり

慈円(拾玉集一七八二・夫木抄・詞林名所考)

53 称宜事せいきじをさのみ聞きつる社けむこそはてはなけきの森もりと成なぬれ

さぬき(古今集一〇五五・明題和歌集)

貴船(8首の中)

58 物おもへは澤さわのほたるも我身わがみよりあこかれ出る玉たまかとそ見る

和泉式部(後拾遺集一一六四・和泉式部集)

男おとこに忘わすられて侍りける頃とき貴かたふねにまゐりてみたらし川かに螢へび

のとひ侍りけるを見て詠よめる

59 奥山おくやまにたきりてをつる瀧津瀬たきつせに玉たまちるはかり物ものなおもひそ

貴船明神(後拾遺集一一六五・和泉式部集)

60 幾世いくよかわ浪なみにしほれて貴船河袖かふねに玉たまちる物ものおもふらん

後京極摂政太政大臣良経(新古今集一一四一・秋篠月清集・)

賀茂名所和歌集

春日宮(7首の中)

67 天あまのはらふりさけ見れば春日かむろなる三笠みかさの山やまに出いし月影つきかげ

阿倍仲麿(古今集四〇六)

もろこしにて月つきを見てよみける

(左注) この歌は昔仲麿を唐土からくちに物ものならはしに遣つかしけるに、

あまたの年としを経てえ帰りまうでござりけるを此この国くにより又

使つかまかりいたりけるにたぐひて詣まできなむとていでたりけ

るに、めい州めいしゅうといふ所の海うみべにて彼の国かのくにの人馬ひとばの銭せんしけ

- (17) 出雲大社 (出雲国出雲郡杵築大社) 3
- (18) 布流社 (大和国山辺郡石上坐布都御魂神社) 3
- (19) 白山 (加賀国石川郡白山比咩神社) 3
- (20) 氣比宮 (越前国敦賀郡氣比神社) 4
- (21) 鹿嶋 (常陸国鹿嶋郡鹿嶋神宮) 4

計144首

※印をつけた「熊野」は、神社名として上っているわけではない。しかし「岩代の王子」「笙の岩屋」「発心門」「岩田川」熊野権現の由来などが記され、94番の歌に「おもふことなきのは誰か引落神の恵も深き御熊野」とあり、熊野速玉神社の「なぎ」の木を詠み込んだものとなっている。該書のとらえ方は熊野に入る周辺の道、末社を含めた極めて広範囲にわたる熊野のとらえ方であるが、神名帳に言う熊野坐、早玉の二社を中心としたものであることには変りがないので、一応「熊野」として掲出した。また、あるいは「那智」も熊野三山として、熊野に一括すべきかも知れぬが、まとまった歌を持つ関係で別に掲出しておいた。配列は右の通りであるが、冒頭に伊勢神宮をおく以外には賀茂宮の後にその末社たる貴船を置く程のことで社格による秩序のような特別な意味は持たない様子である。

四

次に一四四首の所収歌中、作者及び出典のわかる和歌について調べた結果は次のようである。正統国歌大観・私家集大成・正統群書

類従、碧沖洞叢書・歌枕名寄・纂題和歌、日本歌学大系などに当つての結果である。

掲出歌及び番号は該書の歌及びその通し番号、校異及び詞書(必要と思われもののみ記した)は勅、私撰集または私家集等によって記した。下の〃考えられる出典〃の()欄は、多くの集に所収されたものは、主なもののみにとどめた。

伊勢(21首の中)

10 鳴すともこゝをせにせん郭公山田のはらの杉のむら立
西行(新古今集二一七・西行上人集・詠太神宮二所神祇百首和歌)

首和歌)

12 神風や伊勢のはま荻折しきて旅寝やしなぬ荒きはまへに
碁檀越妻(万葉集五〇〇・古今和歌六帖・夫木抄)

碁檀越往二伊勢国一 時、留妻作歌一首

宇佐(3首の中)

24 薦枕かり寝の旅とあかさはや入江のあしの一夜はかりに
伊勢大輔(後拾遺集一一四五・伊勢大輔集・家経朝臣集)

山里にまかりて帰る道に家経が西八条の家近しと聞きて
車を引入て見ありきけるに難波わたりの心ちせられてい
とをかしょう侍りければ硯の箱の上にかきつけ侍りける

男山・石清水(10首の中)

27 男山老て坂ゆく契あらはつくへき杖も神そしるへき
後嵯峨院御製(続拾遺集一四一八)

もこれを裏付けているように思われる。若しこの推定が正しければ、「諏訪」「住吉」「三輪」の順に記されていた名残りということになるだろう。

また、後人の所為と考えられるが墨消ち部分五箇所、重ね書き部分四箇所があり、抹消された部分はいづれも本地垂迹説にかかわるところである。これについては翻刻を参照していただければ幸いである。

なお該書は現在のところ孤本の可能性もつよく、単に勅撰集、私撰集等からの抄出歌を集録したものではない。本集独自の歌を多く含む歌集であって、それぞれの神社にまつわるいわれ、和歌の因縁など、主として左注の形で記された部分には万葉集、日本書紀、神社記、縁起類、説話などをふまえ、編者の巾広い知識、関心の程がうかがわれるもので、この種の歌集としては珍しい中世和歌資料といえるようである。

三

該書にみえる神社名はその大部分が『延喜式』神名帖に載る諸社で、それに石清水、北野、那智、玉島津が加っている。歌数はすべて一四四首。次の神社名の下に記したのはそれぞれの歌数である。

(一) 内は「延喜式」神名帖による神社名及び所在を示す。

(1) 伊勢	(伊勢国度会郡太神宮)	13首			
ひるめの神		1			
(16) 玉津嶋		6			
(15) 葛城神	(大和国葛上郡葛木坐一言主神社)	3			
(14) 三輪明神	(大和国城上郡大神大物主神社)	4			
(13) 諏訪	(信濃国諏方郡南方刀美神社)	1			
(12) 香椎宮	(攝津国住吉郡住吉坐神社)	2			
(11) 那智		7			
(10) ※熊野	(紀伊国牟婁郡熊野早玉神社、熊野坐神社)	13			
(9) 稻荷	(山城国紀伊郡稻荷神社)	6			
(8) 北野		7			
(7) 日吉	(近江国滋賀郡日吉神社)	7			
(6) 春日宮	(大和国添上郡春日神社)	7			
(5) 貴船	(山城国愛宕郡貴布祢神社)	8			
(4) 賀茂宮	(山城国愛宕郡賀茂別雷神社(上社) 賀茂御祖神社(下社))	19			
(3) 男山・石清水		10			
(2) 宇佐宮	(豊前国宇佐郡八幡大菩薩宇佐宮)	3			
鏡宮		1			
朝熊宮	(朝熊神社)	2			
風宮		1			
桜宮		2			
月よみの宮	(月読宮)	1			

『神祇和歌』考(一)

——和歌を中心に——

福井迪子

数少ない「神祇和歌」を集めた書物も、その大半は勅撰和歌集や夫木和歌抄などからの神祇についての和歌を抄出集録したもので、本書のような内容をもった書物は見当たらない。第二章でそのあらましを述べるが、零本ながら、内容的に珍しい一書である。^{注1}

小考では、それぞれの神社にまつわる収録歌のうち、作者名のわかるもの、そしてその歌の考えられる出典について述べ、成立可能な年代について検討したい。また著名な歌人たちの歌の引き方についての問題点、本書独自のものと思われる歌の詠まれ方、時代性の問題等についてもふれてみたいと思う。同時に编者像についても検討できれば幸いである。

二

該書の書誌については、その翻刻に際して解説にふれたので、ここでは必要事項についてのみもう一度簡単にふれておきたい。

室町中期の書写になる該書は、墨付十七丁の零本である。内題は

「神祇和歌」で、巻頭に位置しているが、第一くくり三枚中の第一丁目が破れ失われているので、果たしてこれが原本の巻頭であったか否かは厳密にはわかりにくい。しかし「神祇和歌」との改った標出のし方からみても失われた第一丁は、表紙かまたは扉ではなかつたかと考えたいのである。

とりあげられた諸神社は、勅撰集などの神祇の部がそうであるように「伊勢」からはじまり、宇佐・石清水・賀茂・貴船・春日・日吉・北野・稻荷・熊野・那智・香椎・諏訪・三輪・葛城・玉津嶋・出雲・布流・白山・氣比・鹿嶋に至る諸社で、鹿嶋の半ばから後が欠落している。この欠落については、次に記す本文上の疑問点(落丁の可能性)と或はかかわりをもつのではないかと考えている。すなわち、第二くくり目の終りにあたる十三丁裏に記された「諏訪神社」の祭礼に関する内容から、第三くくり目初めの十四丁表に続く文章の続き具合が唐突で、内容的に関連性がないように思われること、また続く和歌に使われた「住吉の松」の歌語、歌の内容などから「住吉」神社の記事に続いているのではないかとの疑問が持たれ、(他の神社に比して記事の極めて少いことへの疑問もあり)ここに一丁ないしは二丁の落丁のある可能性が考えられる。そして又現形の最後が「鹿嶋」の途中で後を失っているのもこの想定される落丁のために必然的に起きた結果としての欠落ではないかと思われるのである。因みに一くくり目三枚(第一丁破損の事は前述のとおり)、第二くくり目四枚であるのに対して第三くくり目が二枚しかないこと